

# 天女とお化け

小川未明

青空文庫



てんしよく  
天職を自覚せず、また、それにたいする責任を感じず、上のものは、下のものに好悪の感情を露骨にあらわして平気だった、いまよりは、もっと暗かった時代の話であります。

あたらし  
新しく中学の受け持ち教師となったSは、おけ屋のむすこの秀吉を、どういふものか好きではありませんでした。特別にきらった理由の一つは、ほかの生徒のごとく学科ができないからというのではなく、秀吉がいつも、じつと教師の顔を見つめて、なにか恨みをもつように、あるいは相手の心の内をさぐるように、ゆだんのできぬ、いらだたしい感じを、与えるからであります。

ひできち  
秀吉は教場へ入ると、目をたえず教師の顔にとめて、ほかへ動かさうとしませんでした。

「いったい、なんのため、こう自分ばかり見ているのだろう。」と、教師は、不快に思いました。で、つい彼にばかり質問する気になったが、なにをきいても、秀吉の答え

は、ちんぷんかんであります。それというのも、よく話を聞いているのではなく、ほかのことを考えているか、また、心の中で、だれにも想像のつかぬようなことを、思っていたからでした。

これは、算数のときでも、作文のときでも、同じでありました。こうした子供は、不思議に図画だけは、じょうずに書くものだといわれていたが、秀吉のばあいは、静物を写生させても、なにをかいだのか、その外形すら、まとまっていなかったのです。

「これは、手のつけようのない低能児だな。」と、教師は、口の内ですぶやきました。ついに、秀吉の母親が、学校へ呼び出されました。彼のすんでいる部落は、貧しい人々の集まりでもありました。母親は、おそろおそろ職員室へ出頭して、ひくく頭をたれて、いかめしい、ひげのある顔を、まともに見ようとせず、ただ教師のいうことを、額に汗をにじませながら聞いていました。

「あの子は、妙なくせがあつて、人の顔ばかり見ている、勉強がすこしも頭に入っていないが、家ではどんなふうですか。」と、教師は、たずねました。

「先生のおっしゃることを、よく聞いて、頭に入れなければならぬと、家ではいいきか

せているのですが。」と、母親は、恐縮しました。

「いや、人の顔を見るのが、あの子のくせであるか、聞いているのです。」と、教師は、自分にだけする行為なのか、それを知りたかったのです。

「あの子だけは、なにを考えているか、私どもにも、わからないことがあります。ほかの子には、そんなこともありませんが、よく、ねこと遊んでいて、おかあさん、このねこはどんなことを、思っているでしょうかねと、聞くのであります。それは、おかあさんにも、ねこの心の中はわからないよ、ねこに聞いてみなければねという、あの子は、ちよつと見ると、ずるそうだけれど、また、むじやきだから、ねこは、かわいがられるんだねといつて、いつまでも、ねこを見ているのでございます。」と、母親は答えました。

この話を聞くと、教師は、だんだん、秀吉に顔を見られるのを、気味悪く思いました。どうかして、あの子供を、学校へよこさないようにする工夫は、ないものかと考えました。

「おかあさんに聞きますが、あの子は、小さいとき、脳膜炎をわずらったことがありますか。」と、教師はたずねたのです。

母親は、自分の子供が、白痴でないかと、いわれていると気がついたので、

「そんな覚えも、ございませんが。」と、さすがに言葉をごしていました。

「あれで、なかなか人の気持ちや、腹にかくしているようなことを、よく当てる妙などころがあります。」と、彼女は、最後に、その特長をいって、子供を弁護しました。

「それで、おかあさんからも、いつてください。学校にきても、勉強にまったく興味がないくらいなら、そして、先生の顔ばかり見ているようでは、なんの益にもならないことだから、いつそ学校をやめて、奉公にいくなり、家庭で、手に職をおぼえるほうが将来のためにも役立つだろうと、いいきかせてください。」と教師は、こういいのこすと、急に席を立て出ていきました。

あわれな母親は、学校の門をでると、教師から受けた、ひややかな感じに、学校をいやがるのも、子供ばかりを責めるわけにはいかぬと、ふかく考えながら、家路を急いだのでした。

村と町の間に、一軒の医院があります。村人にいわせると、この医者の薬は高いから、めつたに、かかれない。だから、どこでも買ひ薬で、まにあわせるといいうわさをしました。その医院のむすこのKと、秀吉は同級だったので、よく同じ道を話しながら、歩いて帰ることがありました。

ある日秀吉は、Kにいわれるまま、彼の家へ遊びによつたのでした。学校でもKは、よくできるといふ評判でした。教師もKにたいしては、秀吉とは反対で、彼を見る目つきは、いつも柔和であり、ときには、こびるように、やさしい言葉をかけるとさえ思われることもありました。秀吉はKについて、よくふき清められた玄関を入ると、ひやりとした空気を感しました。

かたわらには患者の控え室があつて、そこをぬけると、薬品のおいのする診察室があり、並んで座敷になっていました。秀吉は、Kの客という資格で、案内されるまま、奥にあるKの書齋へみちびかれました。その際、座敷のうすぐらい床の間においてあつた、美しい尾をひろげた大きな鳥に、目をうばわれたのであります。

「君、あの鳥は、なんとこのかい。」と、秀吉は、友だちの机のそばにすわると、すぐたずねました。

「あの鳥を、まだ知らないの。孔雀の剥製なんだよ。」と、Kは答えました。

「ほんとうに、きれいな鳥だね。どこにすんでいるのだろうね。」

「なんでも、南洋の暑い国にいるというよ。」

「どうやって、捕らえるのだろうね。」と、彼は、それから、それへと、空想していき

ました。

「しかし君、あの尾のいちばんきれいなところが、大毒なんだというよ。」と、Kは、秀吉にいいました。

「あの紫色にぴかぴか光るところなの。」と秀吉は、思わず目をかがやかしたのです。

「ああ、そういう話だよ。」

「なめれば死ぬかしらん。」と、秀吉は、いいました。

「それは、死ぬだろう。しかし、もう置物にされて古いのだから、あてにならないが、それより、もつとおそろしい毒薬を見たことがあるよ。ただ見ただけでは、つまらん白い粉さ。一グラムの、いく百分の一でも、それをなめると、獣でも、人間でも、死ぬのだから。」と、Kがいいました。

「そんな、おそろしい薬、ぼく見たいものだな。」と、秀吉は、ため息をつきました。

「家にあるけれど、お父さんが、子供なんかの、見るものではないと、厳重に戸だなにしまつてあるんだよ。」と、友だちは答えました。

「このあいだ、学校へおかあさんが呼ばれて、僕が小さいときに、脳膜炎をやつたの



ではないかと、聞いたそうだよ。」と、彼が正直に、Kにつげると、Kは向きなおつて、

「あのはげ頭がかい。なんで、敏感な君が、ばかなもんか。はげ頭こそ、大酒のみの酒乱なんだよ。よくPTAの会員の家で、へべれけになるんだそうだ。」と、いつて、Kは笑いました。秀吉の帰るとき、Kは玄関まで送つて出ながら、薬室の前をいきかけて、

「君、あすここに、どくろのしるしのついた戸だながあるだろう。さつきいった毒薬のびんが、あの中に、はいつているのだよ。」と、指さしました。

秀吉は、灰色のどくろの画に、なにか特別の胸にせまる鋭いものを感じました。

ちようど、そのころのことでした。町へささやかな教会堂がたてられました。近くの子供たちや、めぐまれない家庭の女たちが、日曜日ごとに、お祈りに集まつて、牧師のお説教をきいたのであります。

牧師というのは、女の外国人でありました。その下に、日本人の信者がいて、いろいろの世話をしたり、なにかと教会のめんどろをみながら働いていました。一人の青年は、髪のちぢれた、やせ姿の芸術家らしく、もう一人は、美しいお嬢さんであり

ました。平常、女のほうは、子供らとオルガンにあわせて、讚美歌をうたい、また希望者に英語を教えたりしました。そして、青年のほうは、子供らに、手工のけいこをしたり、自由画をかかせたりしました。

ある日、この若い男の先生は、子供がならんでテーブルに向かっている前へ、クレオンと紙をくばって、

「なんでも見たこと、また思ったことを、自由に画にして、かいてみたまえ。」といいました。

秀吉は、なにをかいいたらいいものか、自由という意味が、よくわからなかったのです。いつも学校では、教師が問題を出して、それに答えるように教えられていました。線一本でも、まちがってはならぬのでした。だから、自分では熱心にかいたつもりでも、めいめいのものと見くらべて、よい悪いをきめられるので、いつも、ほめられるのは、日ごろ成績がいいとされているものにかぎっていました。秀吉などは、どの科目も、ほめられたことはなかったのです。

いま、この教会からもらったクレオンは、品質が上等とみえて、赤の色はまったく鮮紅だったし、紫の色も、いつか友だちの家で見た孔雀の羽のように光ってい

るし、そして青い色は、ステンドグラスをとおして仰ぐ、あの奥深い大空のようだったので、彼の持つてうまれた創造力は、なにをかきあらわしていいか、頭の中で、出口をしきりとさがしたのです。

彼は、まず、まざまざと目にのこつていた孔雀をかきました。それとならば、彼は、お化けと感ずる、ひげのはえた丸い顔をかきました。しかしそれは、人間の顔ではありません。目から火を吹けば、口からも、ちよろちよると、へびのように、赤い舌を出して、頭をかしげていました。

「だんだん、ほんとうの君がでて、おもしろくなるね。」と、若い先生は、なにを画から見取ったものか、秀吉を勇気づけました。

このとき、とつぜん秀吉は、

「先生、神さまは人間をみんな平等に愛してくださいさるんですか。」と喋りましました。

「そうですとも。正直なもの、また貧しいものは、とりわけ深く愛してくださいさるので。」と、先生は、秀吉を見ながら答えて、目に涙をうかべていました。

やがて、北国の村や、町に、ちらちらと寒い日は、雪が降るようになりました。教

会<sup>かい</sup>では、そのころからストーブをたきはじめました。

ある日<sup>ひ</sup>、秀吉<sup>ひできち</sup>のかいた自由画<sup>じゆうが</sup>は、これまでになかった特異<sup>とくい</sup>のものです。少<sup>しょう</sup>年<sup>ねん</sup>らしい人間<sup>にんげん</sup>が雪<sup>せつ</sup>中<sup>ちゆう</sup>に埋<sup>う</sup>もれて倒<sup>たお</sup>れていました。

そのそばには、いつものたこ入<sup>にゆうどう</sup>道<sup>どう</sup>が、ひげのはえた口<sup>くち</sup>を開<sup>あ</sup>けて、さも勝<sup>か</sup>ちほこるように笑<sup>わら</sup>いながら、赤<sup>あか</sup>い舌<sup>した</sup>を出<sup>だ</sup>している。また目<sup>め</sup>からも一<sup>ひと</sup>筋<sup>すじ</sup>の糸<sup>いと</sup>のように火<sup>ひ</sup>を吹<sup>ふ</sup>いて、少<sup>しょう</sup>年<sup>ねん</sup>の死骸<sup>しがい</sup>を見下<sup>みお</sup>ろしている。そして、この化<sup>ば</sup>け物<sup>もの</sup>には、幾<sup>いく</sup>本<sup>ほん</sup>も手<sup>て</sup>や足<sup>あし</sup>があつて、それがへびのように、電<sup>でん</sup>信<sup>しん</sup>柱<sup>ばしら</sup>や街<sup>がい</sup>灯<sup>とう</sup>の柱<sup>はしら</sup>に、まきついて、つめから血<sup>ち</sup>がしたたつてい

ると、そのとき、頭<sup>あたま</sup>の上<sup>うへ</sup>を孔<sup>くじやく</sup>雀<sup>せつ</sup>のような美<sup>うつく</sup>しい羽<sup>はね</sup>のある天<sup>てん</sup>女<sup>にょ</sup>が、ぐるぐると輪<sup>わ</sup>をえがくごとく飛<sup>と</sup>び舞<sup>ま</sup>っていました。あちらの空<sup>そら</sup>は、真<sup>ま</sup>つ青<sup>さお</sup>で海<sup>うみ</sup>の色<sup>いろ</sup>をし、また片<sup>かた</sup>方<sup>ほう</sup>の空<sup>そら</sup>は真<sup>ま</sup>つ赤<sup>か</sup>で、日<sup>ひ</sup>が沈<sup>しず</sup>みかけていました。

若<sup>わか</sup>い先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>は、この画<sup>え</sup>にひどく感<sup>かん</sup>動<sup>どう</sup>したようすでした。

「なんとという題<sup>だい</sup>をつけたらいいかね。」と、先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>は、秀<sup>ひで</sup>吉<sup>きち</sup>にいいました。

「天<sup>てん</sup>女<sup>にょ</sup>とお化<sup>ば</sup>けです。」と、秀<sup>ひで</sup>吉<sup>きち</sup>は答<sup>こた</sup>えたのです。

「ああ、それがいい。この画<sup>え</sup>の意味<sup>いみ</sup>は、どうやらわかるようだ。」と、先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>は、いつま

でも画に見入っていました。

教会へあつまる子供らの画には、それぞれ特色があり、個性があらわれていたので、教会では、それらの作品をあつめて、一般にしめす展覧会を催すことになりました。

当日は、学校の教師や、また家庭の父兄たちが、参観にやってきました。ちよ  
うど昼ごろのことです。参観者の一人が急に卒倒して、お  
そく医者をよんで、関係者たちは介抱しましたが、診断の結果は、急性脳溢  
血ということがわかって、もはや手の下しようがなかったのです。

このとき、場内係の、自由画を受け持つ若い先生もやってきて、先生は二度  
びつくりしました。死人の頭がはげて、ひげのある丸い顔は、秀吉のいつもかく、お化  
けの顔そっくりだったからでした。



## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社

1954（昭和29）年6月

初出：「キング」

1953（昭和28）年12月

※表題は底本では、「天女《てんによ》とお化《ば》け」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 天女とお化け

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>